から五才までの乳幼児に、愛育研究所乳幼児精神発達簡易検査を実施すると共に、母親に対して育児態度に関する質問紙を郵送し回答を求めた。テストを実施した数は三五八名である。団地群に対する統制群として、一般家庭の乳幼児四百名にテストを実施し、育児態度の質問紙の回答をえた。団地群と統制群における両親の学歴、職業、家族構成などの差をみると、両親の年令が団地群がやや低いという点と、同居家庭が統制群に多くみられる点が異る。

結果　両群の育児態度の違いを、年令差による扱い方の相違を考慮し、乳児、幼児前期、後期の三段階に分けて比較した結果、次のような違いがみられた。

授乳、離乳に関した項目には差はみられなかったが、乳幼児の入浴の回数や下着の取替えなどの回数が団地群の方が少ない。

子どもを世話する時の態度においても団地群には、子どもの世話にかかりきりという状態の母親はあまりみられない。

このような傾向からみると、団地の母親の場合は、育児書やテレビなどを通じて得た新しい育児知識が充分に活かされているのに反して、統制群は祖父母からの圧力、あるいは子どもの面倒をみるおとなの数が多いなどの条件が、母親をして過保護に陥らしめているのではないかということが考えられる。

育児書の利用、玩具や絵本の与え方、叱り方などには特に団地の特徴などというものはみられない。

しかし友達の与え方には明瞭な差がみられた。団地の母親の方が子どもに対してできるだけ干渉を少なくし自由に友達を本人に選ばせ遊ばせている。これは団地の生活が大体同じような階層、職業の人々によって営まれていることからみて当然と言えるかもしれない。

同様にわが子を他の子どもと比較するか、という項目においても、絶えず他の子どもと比較して神経を使う親は統制群に多い。

つまり団地の母親の方が干渉型が少ないと言える。

父親の育児に対する協力、子どもとの接触という点では、団地の父親の方が協力的であり、接触も多いという結果がみられたが、このような事実は父子関係からみて非常に好ましい傾向と言えよう。

次に乳幼児に対するテストの結果を、年令別にわけ、その通過率をみてみたが、はっきり統計的に有意な差があり、団地群の通過率の高かったのは乳児の運動機能における歩行の発達のみに過ぎず、他にはやや差のみられた項目もあったが、全体的にはそれ程大きな差は認められなかった。もちろん今回のテストの数が乳児において特に少数であったので、この事実から真に団地生活が全く乳幼児の精神発達に影響を及ぼさないなどということはできない。

結び　今回われわれが実施した乳幼児精神発達簡易検査、母親の育児態度調査の結果は以上述べたようなものであるが、育児態度の団地にみられるような傾向なり、特徴なりが最も大きな影響を及ぼすのは、テストに現われる知能の発達というような面よりは、むしろ子どもの情緒的、性格的な面に対してではないかと考えられるので今後はそうした方面に対する研究を進めてゆく予定である。

（大会抄録118—123頁）

幼児の日曜日の生活経験

発表の記録より

静岡保育専門学院　小木曽光子
静岡・広瀬保育園　青島孝子

目的　日曜日の幼児の生活経験を月曜日に発表させて、記録し、これにより幼児の言語発達及び家庭環境、あそびの内容を知り、今後の保育の面における参考資料とすることを目的とした。

調査の方法　対象　昭和二九年四月生～昭和三十年七月生の子ども二六名・一クラス・内男児十二名、女児十四名

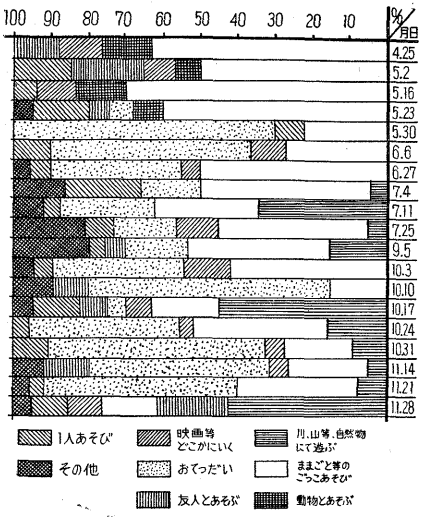
期間　昭和三五年四月～昭和三五年十一月まで

方法　月曜日の朝、前日の幼児の生活経験を発表させ、これを録音テープ及び筆記にて記録した。

調査結果　Ⅰ発表者数

抄録第一図に発表者のクラス全体に対する%を示してあるが、発表数は六月過ぎより出てきている。全体の幼児が、スムースに発表できるためには、入園当初より二カ月余かかったこととなる。グラフの谷の部分は、保母の働きかけのない場合に起った。

話の内容



Ⅱ発表者の一文中の語数

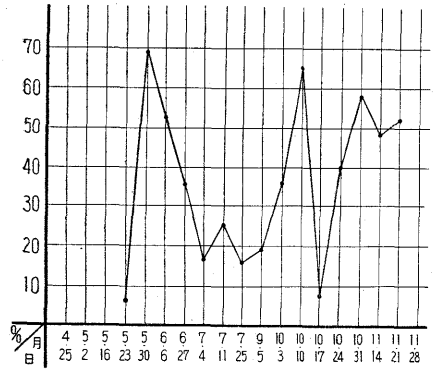
抄録第二図のごとく、四月頃は「ままごと」「すもう」など、語文が大半、五月頃より三語、四語とふえ、十月頃には十四語位を一文中に話せるようになる。

ⅢＩＱ別に見た発表児の一文中の語数

ＩＱと語数の問題は、かなり関連が見られる。（抄録第三図）始めの四月は差はないが、期間がたつにしたがって、はっきり能力差が現われている。

Ⅳ話の内容　この表で注目したいのは「おてつだい」の比率である。このおてつだいのみを抽出してみよう。

おてつだい



Ⅴおてつだい

農繁期五月、六月、十月、十一月には、いちじるしくお手伝いの比率が多くなっている。話の内容も「麦かり、田植え、稲かり」などもう一人前の仕事をしている子どもが多い。これは農村の子どもの姿だと思われる。

Ⅵ　おわりに

この記録により、幼児の言語発達の状態、家庭環境、家庭生活、

子どもの成長状態、子どもに対する親のあつかい方など、一人ひとりの子どもの様子を知ることができた。特に農村という特色ある地方の幼児が、遊びの上では幼児の遊びをしているにもかかわらず、仕事の面では、もはや一人前の働き手として、おおいに家の仕事に役立っていることにおどろく。

ケースワークの手がかり、保育上の反省など、明日の保育計画の足がかりになった。

（大会抄録124—128頁）

生活経験発表記録の一考察

鶯谷さくら幼稚園　松村光子
梅村和子

本研究は、幼稚園と家庭との連絡を密にして、保育の効果を高め、言語指導に役立てる目的で、三年間に亘って行なった、実践記録をもとにしたものである。

研究方法

㈠、毎週月曜日に「日曜日の経験」の発表を子どもたちにしてもらい、それを記録した。（昭和三三年度。一二八名。十八回）（昭和三四年度。一三二名。十四回。）（昭和三五年度。一三〇名。十七回。）

㈡、記録した発表を連絡帖に記入し、各家庭にわたす。

㈢、家庭にしらせた記録には、次のような、㈠〜㈦の質問事項を、毎回貼布して評価してもらい、園でそれを記録整理し、まとめた。

㈠全部本当にあったことを話している。

㈡大体正しいが一部まちがっている。

㈢一部分正しいが殆んどまちがっている。

㈣以前にあったこと（したこと）を話している。

㈤全然なかったことを話している。

㈥その他（　　）

発表目的

子どもの経験発表と母親の評価を中心として、子どもがどのように前日の経験（過去経験）を把握し、表現するものであるかを明らかにし、保育者に役立つ実践研究の効果についてのべる。

結果の考察

生活経験発表記録の評価を整理した結果、次のような諸点が明らかになった。即ち、㈠の項目に関しては、年長児が年少児より多く（女子の方が男子よりも多く）年長児の方が過去経験を正しく話すことを示している。（別表参照）㈡および㈢については、㈠の値の多いとき、対照的に少なくなり、その変動の仕方から、保育の進むことが、過去表現の不完全さを減少させていくものと考えられる。㈣については、各年令児の男女を通じて五月に若干みられる。これは、五月が生活経験発表を開始した月であり、昨日と以前の経験の区別がつきにくいことを示す。年長の男女では、九月を境に、これがなくなっているが、年少児は、断続的に一月までみられる。㈤については、空想し、創作している子どもが女子にやや多く、時間や、場所の規定性の弱いことを示している。㈥および不明の項目では、この評価に対する親の関心および理解協力の態度を知ることができる。

実践研究の効果

㈠園と家庭との連絡を密にすることができた。

㈡幼児の経験発表に対する認識が、保護者と保育者の両方に深ま